



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本に嫁いだ中国人女性の結婚の動機：都市部に嫁いだ女性と農村部に嫁いだ女性の比較を通して
Author(s)	張，月
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要，136，71-91
Issue Date	2020-06-25
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.136.71
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/78791
Type	departmental bulletin paper
File Information	06-1882-1669-136.pdf



日本に嫁いだ中国人女性の結婚の動機

— 都市部に嫁いだ女性と農村部に嫁いだ女性の比較を通して —

張 珮*

【要旨】 本研究では、都市部と農村部に嫁いだ中国人女性の結婚の動機を時期に分けて比較し、違いが生じる原因を究明する。発生期において、貧困な状態にある農村出身の女性たちは、日本の農村部に嫁いでいた。一方、都市部に嫁いだ女性たちは、訪日経験などを通して、恋愛結婚に発展する構図が見出された。変化期において、農村部に嫁いだ女性の場合、中国の農村から都市へ出稼ぎに移動し、都市部でも居場所が確保できないこと、配偶者選択が困難であることなど、都市と農村の経済格差、ジェンダー的要因が女性たちを国際結婚に導いた。都市部に嫁いだ女性の場合、経済的に豊かでないこと、中国では再婚が困難なことなどを理由に、再婚相手を日本から求めることになる。つまり、日中の経済格差と再婚難というジェンダー的要因が複合し、日本への結婚移動が成立した。

【キーワード】 結婚の動機、貧困、ジェンダー

1. 問題提起

1997年から2018年まで（2006年を除く）、夫日本・妻中国による国際結婚は、夫日本・妻外国による国際結婚の首位となっている（2018年厚生労働省 人口動態統計）。日本人男性と中国人女性による国際結婚の地域分布について、表1で示すように、1995年から2015年まで、市部は圧倒的に多数を占めている。更に、郡部の状況を見てみると、1995年の2680組から2000年には5900組へと3220組増加したが、2000年以降は減少する傾向に入り、全体に占める割合は2005年の11.1%を経て、2010年は7.1%とさらに減少している。2015年はわずか6.0%になった。

表1 夫日本・妻中国による国際結婚の地域分布

年次	夫婦数（組）	全国市部		全国郡部		全国	
		実数	構成比	実数	構成比	実数	構成比
1995		20144	88.3%	2680	11.7%	22824	100.0%
2000		30295	83.7%	5900	16.3%	36195	100.0%
2005		46004	88.9%	5721	11.1%	51725	100.0%
2010		65250	92.9%	5012	7.1%	70262	100.0%
2015		73281	94.0%	4696	6.0%	77977	100.0%

（国勢調査の結果により作成）

かつての町村が市に編入合併され、郡部の夫婦が結果的に市部在住になってしまうことも考えるべきだが、2000年前の時期でも2割に至っていない状況であった。ここで、単純な読み替えができないが、次善の策として、郡部を農村部、市部を都市部として読み替えている。つまり、日中国際結婚は以前から都市部では多数である傾向がうかがえた。

一方、国際結婚は農村部から注目され始めたが、都市部にも数多く存在することが見逃されていた。中国人女性は日本人男性と結婚する外国人女性のトップである状況の下、中国人女性の結婚の動機には嫁ぎ先が農村部であるか、都市部であるかにより、どういう違いが見られるかを検討したい。

2. 先行研究

アジア人「花嫁」を対象とする研究は主に国際結婚移動の要因と移動した後の段階における適応の問題をめぐって展開された。本稿では結婚の動機を論じる内容を参考にしたい¹。

郝（2010）は従来の結婚動機に関する研究の結果をまとめた。日本の東北農村の「外国人花嫁」に関する研究は、格差ゆえの「よりよい暮らし」への願望（宿谷 1988）、「アジア諸国の女性にとって、日本の経済力との格差が結婚の動機」（佐藤 1989）であり、中国人妻に関しては、経済格差を根本的原因とする金銭崇拜（葛 1999）があるとされ、雑誌記事などにおいても、「経済格差の存在や日本の暮らしやすさ」（加藤 2004）こそが中国人女性の結婚動機だと論じられてきた（張 2019）。

実証的な研究として、量的研究の手法で国際結婚を考察した中澤（1999）の研究がある。研究の目的は国際結婚によってアジア地域（フィリピン、韓国、中国）から山形県最上地方に嫁入りした外国人妻の意識と実態を把握することによって、①地域社会への定住化と生活の不安解消、②家族・地域住民の異文化及び多文化受容への理解、③地域高齢化に向けた家族内世帯間扶養の方向性などの課題に対応するための基礎的データを提供している。研究方法としては山形県最上地方の8市町村に住む男性と結婚し、調査の時点（1996年）で当該地域に住民登録・居住している中国・韓国・フィリピン出身の外国人妻151名を選定し、郵送調査法と集合調査法を併用した。有効回収票数の内訳は中国22名、韓国36名、フィリピン24名計82票であった。調査データを通し、①来日までの状況、②来日後から現在までの状況、③将来の方向性、④イエに対する考え方を把握した。さらに、外国人妻の定住化の課題と改善策を述べた。国際結婚に至る直接的な動機については、出身国別での違いが顕著に現れた。回答者自身の国際結婚の動機で高い割合を示した項目は、中国・台湾出身者が①日本は経済が発達しているから、②夫の魅力（人間性・性格等）に惹かれたから、③日本の気候・風土が母国と似ているから、韓国出身者が①夫の魅力（人間性・性格等）に惹かれたから、②母国の現実から逃げたかったため、③適齢期で結婚願望が強かったから、フィリピン出身者が①夫の魅力（人間性・性格等）に惹かれたから、②適齢期で結婚願望が強かったから、③母国に送金するため、であった（中澤 1999）。

賽（2011）は2000年代に日本の農村部に嫁いだ中国人女性のライフストーリーを通し、結婚移動の要因、移動後の適応の問題、子供への教育戦略などを考察した。その結果、移動要因について、中国農村出身の3人と都市出身の1人の結婚来日に至る経緯を紹介した。事例を通し

て、中国人女性の送り出し社会におけるプッシュ要因について主要因と、副次要因、さらに媒介要因を見出した。主要因は経済的要因とジェンダー的要因（後の方で詳しく説明する）にまとめ、副次要因は憧憬維持のメカニズムを述べ、媒介要因について、国際結婚紹介所の働きを紹介した。

以上、中澤（1999）は1996年までに「嫁入り」した中国人女性の動機を経済的要因と「夫の魅力に惹かれた」こと、賽（2011）は2000年代に結婚により移住した女性の国際結婚の主要因を経済的要因とジェンダー的要因にまとめた。つまり、それぞれ特定の時期における日中国際結婚の動機を把握した。改革開放以降、中国社会に大きな変化が生じている。社会制度の変革や経済改革により、人々の生活や意識は大きな影響を受け、国際結婚に対する認識も次第に変化してきた。そのような時代の変化による結婚動機の変化を考察する視点は、今までの研究では欠けている。

3. 研究の視点と方法

以上、農村部に嫁いだ中国人女性について、中澤（1999）と賽（2011）の研究ではそれぞれの時期における結婚の動機を考察している。都市部に嫁いだ中国人女性の結婚の動機については筆者の研究（2019）から、時代の推移による結婚の動機の変化という視点を取り入れた。本研究では、都市部と農村部に嫁いだ中国人女性の結婚の動機を時期に分けて比較し、違いが生じる原因を究明する。2010年以降、農村部に嫁いだ人に対する研究がなされておらず、農村部に嫁いだ女性の動機に関する考察は2010年までであるため、農村部と都市部における結婚の動機の比較は2010年までとした。

そのために、2016年6月から、2018年1月までの間、北海道、山形、埼玉、東京、大阪、神奈川などの都市部で中国人結婚移住者を対象に質問紙調査を行った。調査票は、中国語で作られ、調査内容は、日本の都市部に嫁いだ中国人女性の結婚に至る経緯、生活実態、子育て戦略とした。調査方法は、日本語教室に電話で連絡を取り、調査票の配布を依頼した。スノーボールサンプリング法も併用し、個別に調査票を郵送したケースもある。調査票は187部配布し、有効回収数は120部、有効回収率が64.2%であった。

アンケート調査の協力者の中から15人（インタビュー調査の依頼に応じてくれた人）に聞き取り調査を実施した。アンケートで把握できなかった内容を補充し、習慣・文化の違いによる葛藤、国際結婚生活の悩み等を尋ねた。

4. 考 察

（1）国際結婚の段階区分

張（2019）の研究では、日中国際結婚は、1965年から1999年までに徐々に増え、この時期を発生期としている。2000年から2009年までは急激な増加と減少を経て、また緩やかに増加する

傾向にあり、この時期を変化期、2010年以降は減少傾向を示しており、減少期としている（張2019）。このような日中国際結婚の段階区分に基づき、都市部に嫁いだ女性と農村部に嫁いだ女性の結婚動機を発生期と変化期に分けて分析する。

まず、発生期に嫁いだ中国人女性の結婚動機について、都市部と農村部における特徴をそれぞれ見てみる。

（２）発生期（1999年まで）に日本に嫁いだ中国人女性の結婚動機に関する都市部と農村部の比較

①都市部の状況について

表2のように、この時期に結婚した19人のうち、夫に対する愛情だけが動機となる人は7人（36.8%）であり、愛情と日本に対する興味、生活環境・社会福祉に対する安心感、適齢期の影響などを組み合わせる人は6人（31.6%）を占め、離婚の経験を動機とする人は1人（5.3%）であり、離婚の経験と日本に対する興味で国際結婚の道を選んだ人は1人（5.3%）である。貧困と適齢期、日本に対する興味、仲介の勧誘、生活環境・社会福祉に対する安心感などの要素が連動して、国際結婚に繋がった人は2人（10.6%）である。興味本位で国際結婚をしたのは1人（5.3%）である。適齢期を過ぎたため、国際結婚を選んだ人は1人（5.3%）である。つまり、この時期、愛情の関係で国際結婚を選んだ人が1番多く、13人（68.4%）を占めている。次いで、離婚の経験と貧困を理由に結婚した人がそれぞれ2人（10.6%）である。

表2 発生期に都市部に嫁いだ中国人女性の結婚動機

結婚 時期	愛情	興味 愛情	生活環境 社会福祉 愛情	生活環境 社会福祉 興味 愛情	適齢期 愛情	生活環境 社会福祉 適齢期 愛情
発生期	36.8% 7人	10.6% 2人	5.3% 1人	5.3% 1人	5.3% 1人	5.3% 1人
離婚	離婚 興味	貧困 生活環境	貧困 適齢期 興味 仲介の勧誘 社会福祉	興味	適齢期	合計
5.3% 1人	5.3% 1人	5.3% 1人	5.3% 1人	5.3% 1人	5.3% 1人	100.0% 19人

②農村部の状況について

中澤（1999）の研究では結婚の動機として6つの項目（①日本は経済が発達している、②夫の魅力に惹かれた、③日本の気候・風土が母国と似ている、④母国の現実から逃げたかった、⑤適齢期で結婚願望が強かった、⑥母国に送金する）を設定した。中国出身者の動機に関しては上位3位として「①日本は経済が発達している②夫の魅力に惹かれた③日本の気候・風土が母国と似ている」が挙げられた。ただし順位だけが示され、具体的な割合は述べられていなかった。なお、今回の調査（張）では「気候・風土が母国と似ている」という項目を設定して

いなかったため、「①日本は経済が発達している②夫の魅力に惹かれた」について比較した。

③都市部と農村部の比較

発生期において、日本の農村部に嫁いだ中国人女性の動機は①経済的理由、②夫の魅力に惹かれたことである。都市部に嫁いだ中国人女性の動機は①夫に対する愛情、②貧困、離婚の経験との結果になっている。本研究では、農村部の女性の「経済的理由」は都市部では「貧困」と、「夫の魅力に惹かれた」ことは「夫に対する愛情」と同様にみなした。つまり、この時期、都市部では愛情による国際結婚が多いのに対し、農村部では貧困を動機として、国際結婚の道に踏み出した人が多い。この違いがどこから生じたのかを検討するため、結婚動機である「夫に対する愛情」と「貧困な家庭状況から脱出して、裕福な生活に憧れた」ことに影響する要因とその時代における社会状況という二つの面から分析を行う。

a 違いが生じた理由について、個人属性の面から「夫に対する愛情」と「貧困」に影響する要因を分析する。

影響要因としては、個人属性の学歴、出身階層、出身地、訪日経験、夫と出会ったきっかけについて、中澤（1999）の研究結果と比較しながら分析する。それを通し、都市部では「貧困」を動機とする人の少なさ、「愛情」を動機とする人の多さが生じる原因を検討する。

まず、中澤（1999）の調査結果と比べ少数である「貧困」から分析する。

「貧困」は学歴から影響を受けるかどうかについて、今回の調査データから全体的に見ると、表3のようになる。学歴が低いほど貧困を動機とする人が多い。さらに、発生期の状況について、表4で示すように、小卒・中卒・中専卒の場合、「貧困」を挙げた人が約3割となり、高卒、短大・大卒・院卒の場合ゼロとなっている。つまり、発生期でも低学歴の方がこの動機を持ちやすい。また、中澤（1999）の研究で得られた中国人結婚移住者の学歴と今回の調査で得られた発生期に嫁いだ中国人女性の学歴を比較すると、中澤（1999）の調査結果では、短大・大卒者が3割で、高卒者が5割と多い。今回の調査では高卒者が15.8%に減少し、短大・大卒者が7割近くを占めている。以上、学歴の面から見ると、農村部と比べ都市部に嫁いだ女性は学歴が高くなっているため、「貧困」を挙げた人が減少することとなった。

表3 学歴 と 貧困な家庭状況から脱出して、裕福な生活に憧れた のクロス表

			貧困な家庭状況から脱出して、 裕福な生活に憧れた		合計
			無し	有り	
学歴	小卒，中卒，中専卒	実数	20	10	30
		構成比	66.7%	33.3%	100.0%
	高卒	実数	27	1	28
		構成比	96.4%	3.6%	100.0%
	短大卒，大卒，院卒	実数	61	1	62
		構成比	98.4%	1.6%	100.0%
合計		実数	108	12	120
		構成比	90.0%	10.0%	100.0%

P<0.05

表4 学歴と貧困な家庭状況から脱出して、裕福な生活に憧れたのクロス表（発生期）

			貧困な家庭状況から脱出して、裕福な生活に憧れた		合計 (行パーセント)	合計 (列パーセント)	中澤（1999）
			無し	有り			
学歴	小卒，中卒，中専卒	実数	2	1	3	3	2 割
		構成比	66.7%	33.3%	100.0%	15.8%	
	高卒	実数	3	0	3	3	5 割
		構成比	100.0%	0.0%	100.0%	15.8%	
	短大卒，大卒，院卒	実数	13	0	13	13	3 割
		構成比	100.0%	0.0%	100.0%	68.4%	
合計		実数	18	1	19	19	
		構成比	94.7%	5.3%	100.0%	100.0%	

次に、出身地、出身階層と「貧困」との関連性について考察を行った。出身地と貧困の関係について、全体的傾向は表5になる。農村出身の方が貧困を理由に結婚する人が多い。発生期の状況を見てみると、表6で示すように、都市出身の場合、「貧困」を挙げた人がゼロであり、農村出身の場合50.0%となっている。つまり、全体的傾向と合致し、農村出身の方がこの動機を持ちやすい傾向にある。出身地分布の割合について、都市出身者²が圧倒的に多く89.5%，農村出身者が10.5%となっている。一方、中澤（1999）の研究では、中国人女性の場合、具体的な比率を明示していないが、農村出身者が多いと指摘していた。以上のように、都市部に嫁いだ農村出身者が農村部より少ないことが「貧困」を挙げた人が都市部では少ないことと関連している。

表5 出身地と貧困な家庭状況から脱出して、裕福な生活に憧れたのクロス表

			貧困な家庭状況から脱出して、裕福な生活に憧れた		合計
			無し	有り	
出身地	都市	実数	83	4	87
		構成比	95.4%	4.6%	100.0%
	農村	実数	25	8	33
		構成比	75.8%	24.2%	100.0%
合計		実数	108	12	120
		構成比	90.0%	10.0%	100.0%

P<0.05

表6 出身地と貧困な家庭状況から脱出して、裕福な生活に憧れたのクロス表（発生期）

			貧困な家庭状況から脱出して、裕福な生活に憧れた		合計 (行パーセント)	合計 (列パーセント)
			無し	有り		
出身地	都市	実数	17	0	17	17
		構成比	100.0%	0.0%	100.0%	89.5%
	農村	実数	1	1	2	2
		構成比	50.0%	50.0%	100.0%	10.5%
合計		実数	18	1	19	19
		構成比	94.7%	5.3%	100.0%	100.0%

出身階層と「貧困」の関連性について、全体的な状況は表7で示した。出身階層が低いほど、貧困を理由とする人が多い。さらに、発生期の状況について、表8で示すように、貧困層の場合、「貧困」を挙げた人が100.0%、中間階層、富裕層の場合ゼロとなった。つまり、発生期において、この傾向が更に強く現れている。中澤（1999）の研究で対象となった女性は1985年から1990年代半ばまでに来日する中国農村出身者が多数であり、この時期、中国では1985年の「先富論」に基づき、沿岸部地域での特区制度等が実施され、沿岸部の地域が先に富む形で都市と農村の格差は1990年代半ばまで拡大し続け、都市と農村の格差が激しい時期だった。この状況にある農村出身者は出身階層も低いことが推測できる。つまり、農村出身者が多いことは貧困層出身者が多いことを意味する。更に、発生期に都市部に嫁いだ女性の出身階層について、中間層と富裕層は全体の9割以上を占め、貧困層はわずか5.3%しかない。以上から、都市部に嫁いだ貧困層出身者が農村部と比べ、少ないため、「経済的理由」を挙げた人も同様に少ない。

表7 出身階層と貧困な家庭状況から脱出して、裕福な生活に憧れたのクロス表

			貧困な家庭状況から脱出して、 裕福な生活に憧れた		合計
			無し	有り	
出身階層	貧困層	実数	16	9	25
		構成比	64.0%	36.0%	100.0%
	中間階層	実数	82	3	85
		構成比	96.5%	3.5%	100.0%
	富裕層	実数	10	0	10
		構成比	100.0%	0.0%	100.0%
合計		実数	108	12	120
		構成比	90.0%	10.0%	100.0%

P<0.05

表8 出身階層と貧困な家庭状況から脱出して、裕福な生活に憧れたのクロス表（発生期）

			貧困な家庭状況から脱出して、 裕福な生活に憧れた		合計 (行パーセント)	合計 (列パーセント)
			無し	有り		
出身階層	貧困層	実数	0	1	1	1
		構成比	0.0%	100.0%	100.0%	5.3%
	中間階層	実数	14	0	14	14
		構成比	100.0%	0.0%	100.0%	73.7%
	富裕層	実数	4	0	4	4
		構成比	100.0%	0.0%	100.0%	21.1%
合計		実数	18	1	19	19
		構成比	94.7%	5.3%	100.0%	100.0%

次に、「貧困」は訪日経験、夫と出会ったきっかけとどのように関連するのかを検討する。訪日経験に関して、表9で示すように、全体的傾向として、訪日経験のない方が貧困を動機と

する人が多い。発生期の状況について、表10となる。訪日経験を持つ場合、「貧困」を挙げた人はゼロとなり、訪日経験を持たない場合、「貧困」を挙げた人が9.1%となる。つまり、全体的傾向と一致し、訪日経験を持たない方が経済的な動機を持ちやすい。また、発生期に都市部に嫁いだ中国人女性の中、訪日経験を持つ人が42.1%、経験を持たない人が57.9%となっている。中澤（1999）の研究結果では、中国人結婚移住者はすべて嫁ぎ先を訪れないで国際結婚に踏み切っていた。それと比べ、都市部に嫁いだ女性では、訪日経験を持たない人が少ないため、それに対応して「経済的理由」を挙げた人も減少している。

表9 訪日経験 と 貧困な家庭状況から脱出して、裕福な生活に憧れた のクロス表

			貧困な家庭状況から脱出して、裕福な生活に憧れた		合計
			無し	有り	
訪日経験	有り	実数	47	1	48
		構成比	97.9%	2.1%	100.0%
	無し	実数	61	11	72
		構成比	84.7%	15.3%	100.0%
合計		実数	108	12	120
		構成比	90.0%	10.0%	100.0%

P<0.05

表10 訪日経験 と 貧困な家庭状況から脱出して、裕福な生活に憧れた のクロス表（発生期）

			貧困な家庭状況から脱出して、裕福な生活に憧れた		合計 (行パーセント)	合計 (列パーセント)
			無し	有り		
訪日経験	有り	実数	8	0	8	8
		構成比	100.0%	0.0%	100.0%	42.1%
	無し	実数	10	1	11	11
		構成比	90.9%	9.1%	100.0%	57.9%
合計		実数	18	1	19	19
		構成比	94.7%	5.3%	100.0%	100.0%

また、夫と出会ったきっかけと「貧困」との関連性は表11のようになる。全体的に見ると、見合い結婚、仲介結婚の方が貧困を理由としやすい。さらに、発生期の状況を見ると、表12で示すように、同じ傾向が反映され、見合い婚の人だけが「貧困」を挙げた。発生期に都市部に嫁いだ女性の夫と出会ったきっかけの割合に関して、恋愛結婚が多数を占め68.4%となり、見合い婚は26.3%であり、仲介結婚は5.3%しかいない。これは中澤（1999）の研究結果、「中国人結婚移住者の6割強が仲介業者を介した見合い婚」とは大きく異なっている。以上のように、都市部では仲介結婚が農村部より少ないことが「貧困」を挙げた人が少なくなっていることに関連していると考えられる。

表11 夫と出会ったきっかけと 貧困な家庭状況から脱出して、裕福な生活に憧れた のクロス表

			貧困な家庭状況から脱出して、裕福な生活に憧れた		合計
			無し	有り	
夫と出会ったきっかけ	恋愛結婚	実数	64	3	67
		構成比	95.5%	4.5%	100.0%
	見合い結婚	実数	35	5	40
		構成比	87.5%	12.5%	100.0%
	仲介結婚	実数	7	4	11
		構成比	63.6%	36.4%	100.0%
	その他	実数	2	0	2
		構成比	100.0%	0.0%	100.0%
合計		実数	108	12	120
		構成比	90.0%	10.0%	100.0%

P<0.05

表12 夫と出会ったきっかけと 貧困な家庭状況から脱出して、裕福な生活に憧れた のクロス表（発生期）

			貧困な家庭状況から脱出して、裕福な生活に憧れた		合計 (行パーセント)	合計 (列パーセント)
			無し	有り		
夫と出会ったきっかけ	恋愛結婚	実数	13	0	13	13
		構成比	100%	0.0%	100.0%	68.4%
	見合い結婚	実数	4	1	5	5
		構成比	80.0%	20.0%	100.0%	26.3%
	仲介結婚	実数	1	0	1	1
		構成比	100.0%	0.0%	100.0%	5.3%
合計		実数	18	1	19	19
		構成比	94.7%	5.3%	100.0%	100.0%

以上、学歴、出身地、出身階層、訪日経験、出会ったきっかけが「経済的理由」に影響を与えている。都市部に嫁いだ女性と農村部に嫁いだ女性ではこれらの状況が違っているため、発生期において、「経済的理由」について、都市部と農村部では異なる傾向が見られた。

次に、発生期に都市部に嫁いだ中国人女性の1番目の動機として挙げられた「夫に愛情を持つ」ことに影響する要因として、学歴、出身階層、出身地との関連性について、カイ2乗検定を行った結果、有意差が認められない。他方で、訪日経験、出会ったきっかけ、結婚歴が「夫に愛情を持つ」ことに影響を与えていた。

まずは「夫に愛情を持つ」ことに訪日経験はどのように影響するのかを考察する。表13を見ると、訪日経験の方がこの動機を持ちやすいという全体的傾向がうかがえる。さらに、発生期の状況について、表14で示した。訪日経験を持つ人のうち、「夫に愛情を持つ」人が半分ぐらゐを占め、訪日経験を持たない人のうち、「夫に愛情を持つ」人が4割ぐらゐとなっている。つまり、全体的傾向とほぼ一致し、訪日経験を持つほど、夫に愛情を持つ人が多い。発生期に都市部に嫁いだ女性のうち、訪日経験を持つ人は4割ぐらゐおり、経験を持たない人は6割近くになっている。「中国人結婚移住者が全員嫁ぎ先を訪れないで国際結婚に踏み切った」という

中澤（1999）の調査結果と大きく異なっている。明らかに、農村部と比べ、都市部では訪日経験を持つ人が多い。それが「夫に愛情を持つ」ことと相関している。

表13 訪日経験 と夫に愛情を持つこと のクロス表

			夫に愛情を持つ		合計
			無し	有り	
訪日経験	有り	実数	18	30	48
		構成比	37.5%	62.5%	100.0%
	無し	実数	45	27	72
		構成比	62.5%	37.5%	100.0%
合計		実数	63	57	120
		構成比	52.5%	47.5%	100.0%

P<0.05

表14 訪日経験 と 夫に愛情を持つこと のクロス表（発生期）

			夫に愛情を持つ		合計 (行パーセント)	合計 (列パーセント)
			無し	有り		
訪日経験	有り	実数	4	4	8	8
		構成比	50.0%	50.0%	100.0%	42.1%
	無し	実数	6	5	11	11
		構成比	54.5%	45.5%	100.0%	57.9%
合計		実数	10	9	19	19
		構成比	52.6%	47.4%	100.0%	100.0%

さらに、夫と出会ったきっかけと「夫に愛情を持つ」ことの関連性について、表15で示すように、恋愛結婚、見合い結婚のほうがこの動機を持ちやすい。さらに、発生期の状況を見ると、表16になる。恋愛結婚の場合、「夫に愛情を持つ」人が69.2%，見合い結婚、仲介結婚

表15 夫と出会ったきっかけ と 夫に愛情を持つこと のクロス表

			夫に愛情を持つ		合計
			無し	有り	
夫と出会ったきっかけ	恋愛結婚	実数	21	46	67
		構成比	31.3%	68.7%	100.0%
	見合い結婚	実数	30	10	40
		構成比	75.0%	25.0%	100.0%
	仲介結婚	実数	11	0	11
		構成比	100.0%	0.0%	100.0%
	その他	実数	1	1	2
		構成比	50.0%	50.0%	100.0%
合計		実数	63	57	120
		構成比	52.5%	47.5%	100.0%

P<0.05

の場合ゼロとなった。つまり、発生期において、恋愛結婚の方が夫に愛情を持ちやすい。発生期に都市部に嫁いだ女性の中で、恋愛結婚が68.4%、見合い結婚が26.3%、仲介結婚は5.3%しかない。しかし、中澤（1999）の調査結果では、仲介業者を介した見合い婚が6割以上であった。中澤（1999）と比較して、都市部に嫁いだ女性は、仲介結婚が少なく、恋愛結婚が多いため「夫に愛情を持つ」人が多いと推測できる。

表16 夫と出会ったきっかけ と 夫に愛情を持つこと のクロス表（発生期）

			夫に愛情を持つ		合計 (行パーセント)	合計 (列パーセント)
			無し	有り		
夫と出会ったきっかけ	恋愛結婚	実数	4	9	13	13
		構成比	30.8%	69.2%	100.0%	68.4%
	見合い結婚	実数	5	0	5	5
		構成比	100.0%	0.0%	100.0%	26.3%
	仲介結婚	実数	1	0	1	1
		構成比	100.0%	0.0%	100.0%	5.3%
合計		実数	10	9	19	19
		構成比	52.6%	47.4%	100.0%	100.0%

次に、都市部の女性の結婚歴が「夫に愛情を持つ」こととどのように関連するのかを表17で分析する。初婚者の場合、夫に愛情を持ちやすいという全体的傾向に対し、発生期の状況について、表18で示し、初婚者の場合「夫に愛情を持つ」人が50.0%、再婚者の場合ゼロとなる。つまり、発生期でも、全体的傾向と合致し、初婚者の方が「夫に愛情を持つ」人が多い。さらに、初婚者の方が圧倒的に多く、94.7%を占め、離婚の経験を持つ人は1人（5.3%）しかない。これに対し、中澤（1999）の研究では「中国出身者の2割弱が再婚である」ことから、「夫に愛情を持つ」人は少ないことが予想される。再婚者が少ないことが夫に愛情を持つ人の多さに繋がっていた。

表17 結婚歴 と 夫に愛情を持つこと のクロス表

			夫に愛情を持つ		合計
			無し	有り	
婚姻形態	初婚	実数	31	44	75
		構成比	41.3%	58.7%	100.0%
	再婚（元夫が中国人）	実数	30	13	43
		構成比	69.8%	30.2%	100.0%
	再婚（元夫が日本人）	実数	2	0	2
		構成比	100.0%	0.0%	100.0%
合計		実数	63	57	120
		構成比	52.5%	47.5%	100.0%

$P < 0.05$

表18 結婚歴 と 夫に愛情を持つことの クロス表（発生期）

			夫に愛情を持つ		合計 (行パーセント)	合計 (列パーセント)
			無し	有り		
結婚歴	初婚	実数	9	9	18	18
		構成比	50.0%	50.0%	100.0%	94.7%
	再婚（元夫が中国人）	実数	1	0	1	1
		構成比	100.0%	0.0%	100.0%	5.3%
合計		実数	10	9	19	19
		構成比	52.6%	47.4%	100.0%	100.0%

以上、中澤（1999）の研究で、発生期に農村部に嫁いだ中国人結婚移住者の結婚動機の上位2位は、①「経済的理由」②「夫の魅力に惹かれた」ことであった。今回の調査では都市部では「夫に愛情を持つ」人が多数であり、「経済的理由」で結婚する人が少なかった。「経済的理由」を挙げた人が都市部で少ない理由は、学歴・出身地・出身階層・訪日経験・出会ったきっかけが「経済的理由」に影響を与え、学歴、出身階層が低い、農村出身である、訪日経験を持たない、仲介結婚、見合い結婚であるほうが「経済的理由」をもちやすい。都市部に嫁いだ女性たちは学歴、出身階層が高く、都市出身者、訪日経験を持つ人、恋愛結婚をした人が多いことは、結果的に農村部とは異なる傾向につながっていた。一方、「夫に愛情を持つ」ことは訪日経験・出会ったきっかけ・結婚歴から影響を受け、農村部より、都市部では多くの人々に結婚の動機として選ばれていた。

以上、個人属性の面から、都市部と農村部における動機の違いが生じる理由を分析した。次に、社会状況の面から考察を深めていく。

b 違いが生じた理由について、当時中国の社会状況から分析する。

i 都市と農村の経済格差

中国では1985年の「先富論」に基づき、沿岸部地域での特区制度等が実施され、沿岸部の地域が先に富む形で都市と農村の格差は1990年代半ばまで拡大し続けた。1990年代後半に入ると、第9次5ヵ年計画（1996－2000年）で重点開発地域として内陸部が指定され、西部地域での開発政策とも相まって格差は若干縮小した（労働政策研究・研修機構 国別労働トピック：2012年3月）。しかしながら、2000年まで、都市と農村の収入格差は2倍以上の状態が続いている（中国統計年鑑 2001）。

ii 中国国内移動の制限

50年代前半までの中国では、都市間や都市と農村の人口移動は基本的には自由であった。この時期に都市化の進展及び経済建設のための労働力需要の増大に伴い、政府・企業の計画募集と都市への自発的流入は平行していた。しかし、都市人口の増加速度は政府の予想を超え、計画経済のスムーズな運行に支障をきたすようになった。そのため、1958年に「中華人民共和国戸籍登録条例」が公布された。それは農村人口を農村に釘付けにし、農村から都市への人口移動が行われないようにすることを目的とするものであった。1970年代末から80年代にかけて、いくつかの緩和措置が取られたものの、ごく特殊な地域におけ

る一部の人に限定され、改革・開放政策が始動したにもかかわらず、引き続き人口移動の制限政策を維持するという政府の基本原則には変わりがなかった。1990年代後半以降、戸籍制度は本格的改革段階に入った。1997、1998、2001年に3つの改革案が打ち出された。それは、戸籍変更の条件として、安定した住所、職業または収入が要求されているという内容で、中小都市の戸籍改革を目的としていた。中小都市に限定するとはいえ、職業、住居を選択する自由がある程度実現できたことの意味は大きい（田村・夏 2011）。

以上、1990年代は、中国国内における都市と農村の格差が開き、農村から都市への人口移動が完全に遮断される状況の中、出身階層が低く、農村出身で、学歴も低い女性たちが、仲介業者の勧誘で、日本の農村部であっても、中国よりはるかに豊かであることに目を向け、事前に訪れることもなく、豊かな生活を手に入れるため、嫁いできたという構図が見出せた。

一方、都市部では、中間層、富裕層出身で、学歴も高い女性たちが、訪日経験あるいは知人の紹介で夫と出会い、恋愛結婚や見合い結婚で日本に嫁いできた構図になっていた。

以上、発生期において、中国国内における都市と農村の格差問題、農村から都市への移動の制限などにより、学歴も出身階層も低い農村出身者は「貧困」から脱出するため、仲介業者を介し、日本の農村へ嫁いできた。都市出身者の場合、出身階層も学歴も農村出身者より高く、経済的な面でも、農村出身者より優位に立つ。こういう都市出身の女性たちにとって、訪日することも困難ではなく、日本に知人を持つこともありうる。訪日経験や知人の紹介を通し、「愛情」で日本人と結婚することにつながった。

（3）変化期（2000－2009年）に嫁いだ中国人女性の結婚動機に関する都市部と農村部の比較

① 都市部の状況

変化期に結婚した49人の動機については表19にまとめた。変化期に結婚した人は愛情だけを動機とする人は9人（18.4%）、愛情と興味、生活環境・社会福祉、適齢期を組み合わせる人が6人（12.2%）であり、これに対し、愛情と離婚、愛情と貧困で国際結婚を選んだ人は4人（8.2%）いる。離婚の経験、離婚の経験と日本に対する興味、生活環境・社会福祉に対する安心感などの組み合わせで結婚した人は5人（10.2%）を占め、貧困と離婚の関係で結婚した人は4人（8.2%）であり、貧困の関係で結婚した人は4人（8.2%）である。興味を結婚の理由として挙げる人は7人（14.3%）いる。適齢期を過ぎたため、国際結婚を選んだ人は6人（12.2%）である。生活環境に対する安心感から結婚する人は2人（4.1%）である。仲介業者の勧誘で結婚したのは1人（2.0%）であり、仲介業者の勧誘と日本に対する興味を動機とする人は1人（2.0%）である。つまり、この時期に嫁いだ女性は愛情だけが動機となる人が少なく、愛情と日本に対する興味、生活環境・社会福祉、適齢期の組み合わせ、愛情と離婚の経験、貧困の事情の組み合わせ、離婚の経験、貧困などの事情が動機となっている。張（2019）の研究ではインタビュー調査の結果から、これらの要因のうち、離婚の経験、貧困が主な要因として、動機に影響するか、愛情と組み合わせで動機に影響することがわかった（張 2019）。

表19 変化期に都市部に嫁いだ中国人女性の結婚動機

結婚時期 \ 動機	愛情	興味 愛情	社会福祉 興味 愛情	適齢期 生活環境 愛情	適齢期 生活環境 社会福祉 興味 愛情	離婚	離婚 愛情	離婚 興味	離婚 興味 生活環境 社会福祉
変化期	18.4% 9人	4.1% 2人	2.0% 1人	2.0% 1人	4.1% 2人	6.1% 3人	6.1% 3人	2.0% 1人	2.0% 1人

貧困	貧困 生活環境	貧困 離婚	貧困 離婚 生活環境	貧困 離婚 興味 生活環境 社会福祉	貧困 適齢期	貧困 愛情	興味	適齢期	生活環境
4.1% 2人	2.0% 1人	4.1% 2人	2.0% 1人	2.0% 1人	2.0% 1人	2.0% 1人	14.3% 7人	12.2% 6人	4.1% 2人

仲介の勧誘	仲介の勧誘 興味	合計
2.0% 1人	2.0% 1人	100.0% 49人

② 農村部の状況

賽（2011）は中国では国内政策的にもまた物理的にも中国都市居住者に比べて外国への移動が困難な中国農村出身者3人、また農民女工の出稼ぎ先である発展した地方都市出身者1人に焦点を当て、彼女たち（4人とも初婚で日本人と結婚した）の結婚移住への経緯を解明した。中国人女性の結婚移住のプッシュ要因として、主要因と副次要因を析出した。主要因としては、経済的要因に加えて、中国国内移動の観点を付加するとともに、ジェンダー的要因（男尊女卑の慣習、出稼ぎ移動による問題）を見出した。副次要因としては、憧憬維持のメカニズムを見出した。考察を通して、インフォーマントは経済、ジェンダー、そして面子の重視がもたらす憧憬維持のメカニズム、国際結婚紹介所の働きといった各側面、とりわけジェンダーにおいて、出身社会の周辺に位置づけられていたことが判明した。彼女たちは、与えられた「国際結婚」しかないという状況で、海外へ結婚移民する道を「最善」として選択した（賽 2011）。

③ 都市部と農村部の比較

以上のように、2000年代の時期に、都市部に嫁いだ女性は貧困、離婚の経験が主な動機となっている。農村部に嫁いだ女性は経済的理由、ジェンダー的要因が国際結婚移動の主要因になっている。一見、貧困と経済的理由が一致するように見えるが、その内実が同じ傾向にあるかどうか、また、離婚の経験、ジェンダーの内実がどう違うのか、を探るため、都市部と農村部に嫁いだ女性の動機の主要因について、内実を比較分析してみる。

a 経済的理由（貧困）について、都市部と農村部に嫁いだ人の状況を比較する。

i 都市部の場合

インタビュー調査の結果から、変化期に結婚したAとCは2人とも中卒で、出身家庭もそれぞれ貧困層と中間層であり、離婚後、家族から経済的援助ももらえず、自分の力で、自分の生活、母子2人の生活を余儀なくされていた。学歴が低いことは就職の時に不利になり、Aはバイトとして働かざるを得なかった。Cは息子がいて、時間通りの勤務は難しいため、自営業をやっていた。2人とも経済的に苦しい生活を送っていた。それにとどまらず、Aは社会生活の様々な面で、社会の底辺に追いやられることの辛さを感じ、Cは息子がいるため、息子の結婚のために用意すべき結納金がないことに困っていた。Aの場合、日本での滞在経験を通し、日本での生活のしやすさがわかり、国際結婚へ進むことになった。Cは周りの人の国際結婚を通し、階層移動が実現できたことを知って、打開策として国際結婚を考え始めた（張 2019）。

A、Cのような人を生み出す当時の社会環境を考察してみよう。1978年に開かれた第11期3中全会以来、鄧小平を中心とする党中央が確立された。全党の活動の重点を経済建設へ移行することが決定され、「小康社会」を建設する思想を打ち出した。20世紀末に、「小康社会」が基本達成された。しかし、基本達成は低いレベルであり、小康の水準に達していない人は数多く存在する。また、小康を達成する人口の分布状況について、都市と農村の間、東部西部の間、異なる収入層の間に発展水準の差が大きい。更に、小康の基本達成は物質生活の領域にとどまり、社会福祉、環境問題、精神生活の領域に行き渡っていない。こういう小康社会の現状に基づき、中国共産党第16回全国代表大会は21世纪初頭20年で「全面的小康社会」建設の目標を定めた。21世紀初頭10年は小康社会の基本達成から全面的達成に向かう転換期である（高 2014）。

以上のように、この時期は「小康社会」の基本達成から「全面的達成」へと転換する過程にあるため、生活水準が小康に達していない人は数多く存在する。こうした状況の下、AとCのように、日本での滞在経験や知り合いの人の滞在経験から、日本と中国の差を強く意識しながら、社会的地位の向上や現実的問題の改善のため、国際結婚の道に踏み出した人も少なくない（張 2019）。

ii 農村部の場合

賽（2011）は中国人女性の送り出し社会におけるプッシュ要因の主要因である経済的要因について、以下のようにまとめた。3名の農村出身の中国人女性の出身地域においては、柱となる産業がほとんどなく、伝統的な農業に頼っているが、そこから得られる収入は限られている。農村部の人々は家族を養うため、農業以外の収入で家計を補うことを余儀なくされる。一方で、経済改革によって都市部及び東南部沿岸地域は急速に繁栄し、農村部との格差はますます開いている。現行のこの傾斜的な政策のもと、都市人がより利益を得、裕福になる機会を手に入れている。そのため、億単位とも言われる農村出身者が故郷を離れ、大都市へと出稼ぎに行く。二つの事例のインフォーマントも実際、家計を助けるため、故郷から都市部あるいは経済先進地域へ出稼ぎを経験していた。この3人のプッシュ要因として、出身国国内の格差が存在していることが明らかになった。中国国内の格差が維持される背景としては、現行の中国戸籍制度などにより、農村出身者は長期にわたって居住

していても都市の一員としての地位は得られないことがある。E子の、結婚しないと「何の保障もない」という語りには、都市住民の医療、福祉などにおけるメリットを都市戸籍を持たない農村戸籍の持ち主は享受し得ないという実態が端的に示されている。このように、制度によって経済的な国内格差を維持することが彼女たちを中国社会で「周辺化」すると考えられる（賽 2011）。

iii 都市部と農村部の比較

2000年代、日本の都市部と農村部に嫁いだ中国人女性は「経済的理由」が結婚の動機として共通している。しかし、「経済的理由」の内実が異なる。農村部に嫁いだ女性の場合、農村出身者が多く、彼女たちは限られた農業収入を補うため、都市へと出稼ぎに移動した。しかし、都市部においても戸籍制度の制限で、都市人としての地位が保障されない。こういう中国国内の経済格差が国際結婚移動を促した。都市部に嫁いだ女性の場合、都市出身の人が多く、この時期、中国社会は小康社会の基本達成から、全面的な達成に向かう途中である。こういう転換期にある中で、小康達成の人口分布が不均衡な状態にあるため、都市部であっても、生活水準が小康に達していない人が存在するのも不思議ではない。このような恩恵を受けていない女性たちは、日本での滞在経験や、知人の滞在経験から日本と中国の差を意識しながら、国際結婚の道へ踏み出した。

b 離婚の経験、ジェンダーについて、都市部と農村部の状況を比較してみる。

i 都市部の場合（離婚の経験）

今回のインタビュー調査に応じた15人のうち、3人が変化期に結婚した。この3人（A, B, C）がすべて中国で離婚した経験を持ち、再婚という形で日本人と結婚した。A, B, Cは離婚することで、周りから偏見を持って扱われたことを経験した。Aは他人の目を気にすることの辛さを痛感し、中国での再婚を諦めた。B, Cは連れ子がいて、周りの非難を浴びても、子どものために、立ち上がり、母子2人のこれからの人生を考えなければならぬ立場となった。Bは娘を守るため、家族が持ちかける縁談の話に応じなかった。Cは新しい家族を作り上げても、子ども間の関係作りが夫婦関係に影響を及ぼし、家族関係がうまく行かず、破綻した。つまり、変化期では離婚した女性に対する世間の偏見と再編家庭の関係作りの難しさが女性の再婚をいっそう困難にする。この困難さこそ、国際結婚のきっかけとなった。こういう特徴が生じる原因は、中国の社会状況の面から求められる。

中国での離婚件数の推移は図1で示すように、1978年以来増加してきている。特に2002年から増え方が大きくなっている。しかし、離婚が急激に増加する最初の段階において、離婚に対する世間の意識の変革が離婚の増加に遅れており、2000年代の時期、世の中はまだ「家本位」の観念が崩れておらず、離婚に対し、否定的に評価する傾向が残されていた（張 2008）。特に、「男尊女卑」の文化が根強い中国社会は、離婚した女性に対し、偏見を持ちやすく、女性のほうが離婚からのダメージが大きい。特に連れ子がいる場合、男性から敬遠されること、再編家庭の関係作りが困難なことなどが再婚をさらに難しくする。この時期に離婚した女性は国際結婚の道を選んだ人が多いということがわかった（張 2019）。

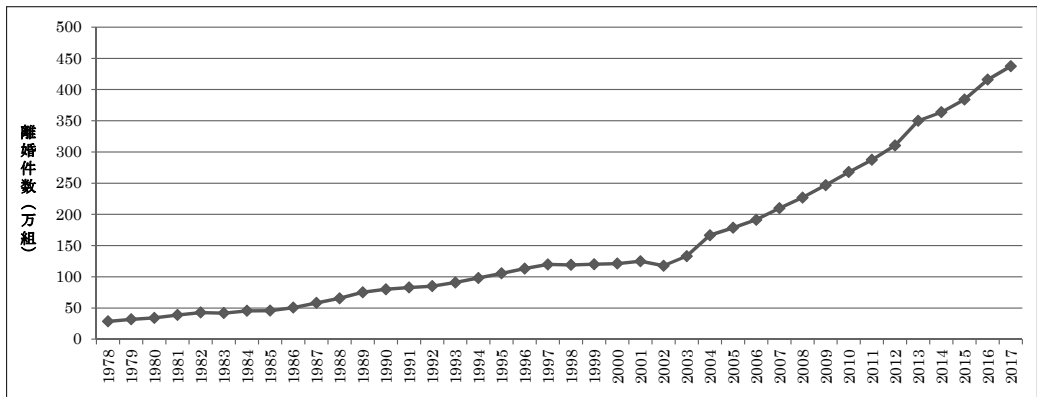


図1 離婚件数の推移（中国民政部の統計データにより作成）

ii 農村部の場合（ジェンダー的要因）

賽（2011）は農村出身者3人，都市出身者1人（4人はすべて初婚である）の事例研究を通して，ジェンダー的要因について，中国家父長制的ジェンダー要因と新国際分業におけるネオ家父長制的ジェンダー要因にまとめ，以下のように論じた。

「中国家父長制的ジェンダー要因」

中国家父長制的ジェンダー要因はもっとも典型的に現れているのは男尊女卑という慣習である。H子が「息子がいないことの母親の悲しみ」を感じることも，E子の家族が「やっと待望の男児が生まれた」と言ったことも，中国は伝統的に男系の後継者に対する執着が強いことの現れである。女兒は特に農村部ではあまり役に立たないという考えがいまだに根強いことが事例のなかからうかがえる。くわえて，息子と比べ，娘はいずれほかの家に入るため，当てにならないと家族に認識されている。それゆえに，娘を外へ嫁がせることで，家族は将来の保障と交換することを期待する。それは，女性を価値のある「商品」として置き換えることになる。容姿具備の女性は，付加価値の高い「商品」となり，さらに，年齢も「商品」の価値を決める一つの要素となる。男性が女性に対し，「適齢期」をもうけ，容姿のいい女性を選別し，その枠から逸脱する者を異物視し，周辺に追いやるのである。

「新国際分業におけるネオ家父長制的ジェンダー要因」

経済のグローバル化は，中国の女性にも多大な影響を及ぼしている。製品産業の生産拠点が急速に中国大陸へと移転した結果，中国大陸でもとくに南部で大規模な出稼ぎ女工の雇用形式が生まれた。E子も外資系工場で，製造ラインの単純作業に長年従事したが，技術は身につけていない。グローバル資本は輸出加工区での女性若年工場労働者を使い捨てにするという新たな家父長制的搾取を生み出している。この雇用により，女性たちと出身共同体との間に「文化的隔たり」を生じさせる。E子も生活様式が都市化され，出身地には「もう帰りたいと思わない」と語った。都市部での長期間にわたる出稼ぎは「共同体に戻れない」ほど出身社会から切り離される現状を作り上げるといって問題を生じさせる。こ

の雇用がもたらすもう一つ重要な問題は、出稼ぎ女工の配偶者選択の困難さである。都市部男性は、戸籍による制度上地位、経済上地位、学歴等の点で下位に置かれている農村出身の出稼ぎ女性を回避するもしくは見下ろす傾向がある。それ以外、珠江デルタにおいて、「北妹」と呼ばれる出稼ぎにきている内陸の女性たちは風俗業に従事し、男性たちは妻として地元の女性を選ぶ傾向があるが、「女遊び」の相手として、「北妹」を選ぶ傾向がある。男性の浮気は普遍的な現象となり、この現象は地元女性を含む女性たちの地位を以前より低くする。大半の地元の女性たちは仕方なく現実を受け入れるなか、D子はこの新しい家父長制に反抗し、そこから逃げ出した（賽 2011）。

iii 都市部と農村部の比較

以上、2000年代では、日本の農村部と都市部に嫁いだ中国人女性の動機として「ジェンダー的要因」の内実が異なっている。農村出身で日本の農村部へ嫁いだ女性の場合、「男尊女卑」の観念が根深く残されている中国農村では、適齢期を過ぎた女性、容姿が悪い女性が周辺に追いやられることになり、都市へ出稼ぎのため移動して、戸籍の制限で、長く働いても都市の一員にならないことに学歴が低いことも加わり、配偶者選択の困難がある。このような出身共同体と都市の間に挟まれている女性たちは居場所を日本の方へ求めることになる。都市出身の場合、珠江デルタ地域では、女性の出稼ぎ移動により、風俗業が氾濫しており、男性の浮気から影響を受けて、日本の方へ結婚相手を探さざるを得なかった。都市部に嫁いだ女性の場合、2000年代において、離婚が急激に増加する最初の段階において、離婚に対する世間の意識の変革が離婚の増加に遅れていて、世間はまだ家庭の安定を重視し、離婚は知人、親族に対し顔向けできないことだと意識された。世間は離婚者に対しても偏見を持っている。特に男尊女卑が根強い中国では、離婚した女性は男性より弱い立場に立っていて、女性の方が離婚によるストレスが大きい。さらに、女性は離婚だけではなく、再婚の際も男性より不利な立場に置かれている。中国では男性の再婚率は女性の再婚率を大きく上回る現実がある。周・李（2002）は「再婚市場」の中で男性の再婚率が女性のそれを大きく上回る理由として、男性は経済力を持つため、容易に自分より若い相手を見つけられることを挙げた。高・張（2012）の研究によると、北京では男性の再婚率は女性の2.4倍となることが指摘された。特に、連れ子がいる女性の場合、状況が厳しくなり、再婚が実現できても、連れ子がいると、家族関係の維持も複雑な問題として、受け止めている。つまり、都市部に嫁いだ女性と農村部に嫁いだ女性のジェンダー的要因は同じく「男尊女卑」の観念から影響を受けたが、その影響の内実が異なる傾向にある。

5. まとめ

以上のように、中国人結婚移住女性たちは2つの要件の働きにより、嫁ぎ先は農村部であるか、都市部であるかが決められる。それは、①嫁ぐ前の段階における境遇、②訪日経験・日本に知人を持つことである。

発生期において、農村部に嫁いだ女性たちは、中国では農村から都市への移動が制限され、

農村出身者が貧困な状態から逃れることができなかった。この人たちは訪日経験を持たないため、日本とのつながり作りは仲介業者を介する手段しかなかった。彼女たちは業者婚の形で、農村部に嫁いだ。都市部に嫁いだ女性たちは恵まれた境遇にあったため、訪日することも容易に実現でき、その訪日経験は日本との架け橋となり、日本人男性と出会え、結婚に至った。

変化期になると、農村部に嫁いだ人と都市部に嫁いだ人が辛い境遇にあったことで共通しているが、その境遇の内実が異なった。農村部に嫁いだ人の場合、農村出身者は都市への出稼ぎ移動ができて、根本的な身分転換が実現できず、都市人との結婚にも期待できなかった。都市出身者であっても、出稼ぎ移動により、影響を受け、男女関係に変化をもたらした。こういう女性たちは日本の都市部とのつながりを持たないため、仲介業者を介し、農村部へ嫁いだ。都市部に嫁いだ人の場合、中国で小康達成の人口分布の不均衡により、生活水準が低いことに加わり、再婚難の状況に陥った人が存在する。こういう女性たちは、訪日経験、あるいは知人の訪日経験を通し、日本と中国の差を強く意識し、都市部へ嫁いだ。以上で、境遇という要件をもとに、日本の都市部への訪日経験あるいは、都市部に知人を持つことという要件が満たせば、都市の方へ、満たせない場合、農村の方へ嫁ぐこととなった³。

農村部に嫁いだ中国人女性の調査データを持っていないため、中澤（1999）、賽（2011）の研究結果をもとに、比較分析を行った。この2つの研究が取り扱っている調査対象者の多くは、農村出身で、出身階層も学歴も低い女性たちであり、それ以外の女性の状況を把握しきれないため、比較分析の結果にも偏りが生じる可能性がある。今後の課題として、農村部における国際結婚のデータ収集に取り組んでいく。

註

- 1 結婚移住女性の生活実態、適応の問題については別稿で検討する。
- 2 今回の調査で得られた都市出身者は出身地に対する質問への回答によって判定したものである。しかし、農村出身者の場合、出稼ぎにより、都市の方へ移動し、子どもも都市で生まれ育ったことが想定でき、つまり、農民工2代目がどれほど存在するのかは量的調査では把握しきれなかった。それについてはインタビュー調査で明らかにする。
- 3 減少期になると、世間の離婚に対するイメージが変わり、国際結婚を選ばなくても中国社会で受け入れられるようになった。これに応じ、都市部で結婚した事例のうち、「愛情」で結婚するケースが多い傾向がわかった（張 2019）。

参考文献

- 張学見, 2008, 「改革开放以来我国离婚率嬗变研究—以社会历史背景变迁为视角—」首都师范大学硕士学位论文。
- 張玥, 2019, 「日本の都市部に嫁いだ中国人女性の結婚の動機—時代による変化の視点から—」北海道大学大学院 教育学研究院紀要 第135号。
- 葛慧芬, 1999, 「国際結婚に対する地域ケアシステム作りの重要性—中国人花嫁の事例から—」『日中社会学研究』7: 日中社会学会。

- 郝洪芳, 2010, 「日中国際結婚に関する考察—業者婚する中国女性の結婚動機を中心に」 京都社会学年報.
- 加藤薫, 2004, 「中国花嫁, 急増の謎と男たちの本音」『婦人公論』89(14): 132-5.
- 高文韬, 2014, 「中国小康社会发展的历史进程研究」華東理工大学 硕士学位论文.
- 高穎・張秀蘭, 2012, 「从再婚人口的性別差异看城市女性的再婚困境」南方人口 第27卷: 53-60.
- 柳蓮淑, 2005, 「外国人妻の世帯内ジェンダー関係の再編と交渉」『人間文化論叢』第8巻.
- 中澤進之右, 1999, 『農山村の結婚難とアジア系外国人妻』東畑四郎記念研究奨励事業報告 23.
- 賽漠卓娜, 2011, 『国際移動時代の国際結婚—日本の農村に嫁いだ中国人女性』勁草書房.
- 佐藤隆夫, 1989, 『農村（むら）と国際結婚』日本評論社.
- 周江・李駿, 2002, 「从离婚到再婚: 女性的视角」社会 2002, 11: 38-39.
- 宿谷京子, 1988, 『アジアからの花嫁—迎える側の論理』明石書店.
- 田村紀之・夏欣, 2011, 「中国における国内労働力移動と農民工」Discussion Paper (Econ)No.1.
- 厚生労働省, 2018, 「夫妻の国籍別にみた年次別婚姻件数」(2019年3月2日取得, <https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/81-1.html>).

The Marriage Motivations of Chinese Women — by comparing the women marrying in urban and rural Japan —

Yue Zhang

Key Words

marriage motivation poverty gender factors

Abstract

This paper compares the marriage motivations of Chinese women marrying in urban and rural Japan through different stages and analyzes the reasons for the differences in each stage. For the women who got married before 1999, they were faced with a big urban-rural income gap in China as well as a lack of free movement from rural to urban areas. Therefore, they chose to marry in rural Japan through intermediary agents so as to get rid of poverty. For the women who married in urban Japan during the same period, they were relatively well-off, and had the experience of visiting Japan, which facilitated their meeting, falling in love and getting married with Japanese men. For the group of women who married in rural Japan between 2000 and 2009, they were usually born in rural China. Although they moved to the cities as migrant workers, they could not become urban residents due to their census registrations. As a result, the chance to marry Chinese urban men was slim. At the same time, as the number of young women who went out to work increased, it also had an impact on local urban women, which was especially true in the Zhu Jiang River delta region. Such issues as urban-rural gap and gender factors pushed these women to choose international marriage. Over the same period, women who got married in urban Japan also faced dilemma. At that time, China was in the transition from building a basic to a comprehensive well-off society, and some people were not in the coverage of the benefit of the reform, so their life was relatively poor. Among them, many had experienced divorce, and it was difficult for them to marry again. From people around, they got to know the gap between Japan and China, thus decided to marry in Japan. Such economic gap between China and Japan and the difficulty in remarrying were essential boosters for international marriage at that time.